

第3図 収 量

4 ま と め

以上の結果により、春系キュウリの定植後夜温管理は、当初 15℃を目標にして初期生育を促して早期収

量を増し、10節ころの雌花開花時から10℃を目標に管理して栄養生長過多になるのを抑え上物生産を高めることが望ましい。

ハウスキュウリ液肥施用について

高橋良治・小野公二・小原房雄
(岩手県園芸試験場)

1 ま え が き

最近東北地方において、ハウス栽培面積が年々増加している。しかし、ハウスの大型化に伴い管理作業の省力化の要請が強くなっている。ハウス栽培における施肥の省力化を図り、土壌の悪化防止にも有効な液肥

の施用方法について検討した。ハウスキュウリに対し昭和44～47年にわたり試験を実施した結果、元肥を堆肥のみとし、液肥を施用した区及び元肥を堆肥と化成肥料とし、追肥に液肥を施用した区が、化成肥料で追肥した慣行区と同等またはそれ以上の収量が得られ、液肥施用が有効な手段と認められた。

2 試 験 方 法

1) 耕 種 概 要

年 度	播 種 期	定 植 期	畦 幅	株 間	条 数	仕 立 本 数
44・45年	2月12日	3月25日	120 cm	100 cm	2	2
46・47年	"	"	"	60 cm	2	1

2) 供試条件

施肥量 (10a 当り kg)

試験区	元 肥			追 肥			合 計			肥 料 名
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	
① 液肥施用		(15)		30	15	24	30	30	30	住友液肥2号(10-5-8)
② 無堆肥 液肥施用		(15)		30	15	24	"	"	"	同上
③ 元肥化成 +追肥液肥	13+(2)	17+(5.5)	12	15	7.5	12	"	"	"	硫加磷安12号(13-17-12) 住友液肥2号(10-5-8)
④ 元肥化成 +追肥化成 (標準)	13+(2)	17+(12)	12	12+(3)	1.0	12	"	"	"	硫加磷安12号(13-17-12) 尿素複合磷加安V23号 (23-2-23), 硫安(N-21)

各区とも炭カル 200 kg, 堆肥②以外は 3 t 施用。元肥 () 内は硫安, 過石, 塩加で補正。

追肥時期

試験区	4 月	5 月	6 月	7 月	合計
① 液肥施用	5日, 15日, 25日	5日, 15日, 20日, 25日	5日, 10日, 15日, 20日, 25日	5日, 10日, 25日	15回
② 無堆肥液肥施用					
③ 元肥化成 +追肥液肥施用	5日	5日, 20日	5日, 15日, 20日	5日, 10日	8回
④ 元肥化成 +追肥化成施用	15日	5日 25日	15日	10日	5回

1回かん水量 5mm 相当とし, 液肥は 250 ~ 270 培施用。液肥使用区以外も同じかん水量とした。

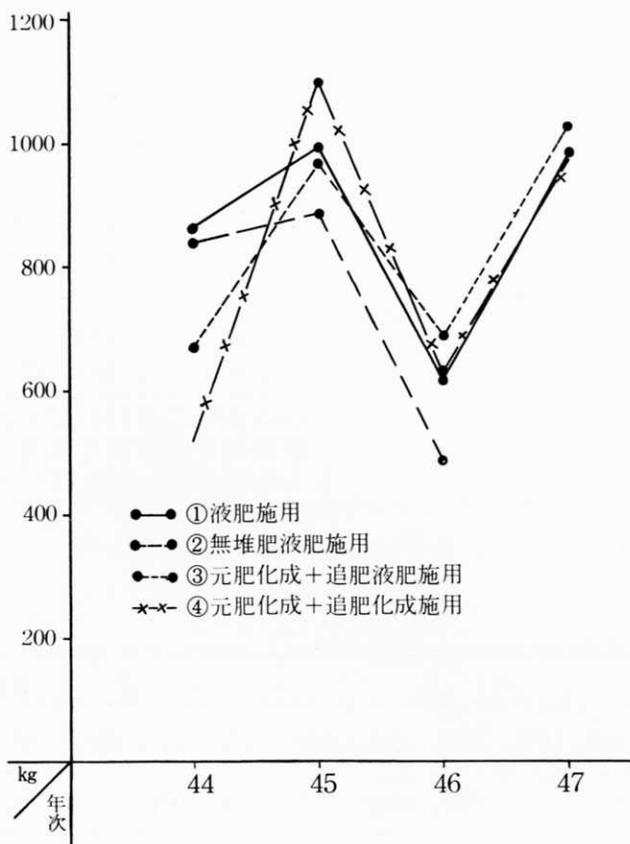
3) 供試品種 夏埼落3号

3 試験結果

第1表 収量 (10株当り平均)

試験区	項 目	良 果		曲 果		く ず 果		良果+曲果		く ず 果率 %	a 当り 収 量 kg	収量比 %	
		個数	重量 kg										
① 液 肥 施 用	44年	116	14.2	290	37.6	96	12.5	406	51.8	19.1	862.6	165.2	
	45 "	251	30.4	273	29.0	52	8.5	524	59.4	9.0	990.0	89.9	
	46 "	66	7.4	124	14.5	21	2.1	190	22.0	10.0	610.5	98.1	
	47 "	210	23.2	107	11.9	98	11.0	317	35.1	23.6	974.6	99.8	
	平均	160.8	18.8	198.5	23.3	66.8	8.5	359.0	42.1	15.7	859.4	106.7	
② 無 堆 肥 液 肥 施 用	44年	124	16.6	258	33.0	61	10.2	382	50.1	13.1	834.3	159.9	
	45 "	234	26.5	231	26.4	72	11.4	462	52.8	13.4	880.6	80.0	
	46 "	57	6.2	93	11.3	20	2.0	150	17.5	11.8	486.1	78.1	
	47 "	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	平均	138.3	16.4	194.0	23.4	51.0	7.9	331.3	40.1	13.3	733.6	98.0	
③ 元 肥 化 成 +追肥液肥施用	44年	104	13.0	230	19.6	54	7.7	334	40.2	13.9	670.3	128.4	
	45 "	241	29.0	244	27.2	79	14.0	485	56.3	14.0	937.8	85.2	
	46 "	82	8.3	136	16.4	27	2.8	218	24.7	11.0	686.6	90.6	
	47 "	189	21.3	133	15.7	151	1.8	322	37.0	31.9	1027.8	105.2	
	平均	154.0	17.9	185.8	19.8	77.8	6.6	339.8	39.6	18.6	830.7	103.1	
④ 元 肥 化 成 +追肥化成施用	44年	98	11.7	170	19.6	50	6.5	268	31.3	15.7	522.2	100	
	45 "	236	31.1	294	35.0	74	13.9	530	66.1	12.3	1101.1	100	
	46 "	64	7.0	126	15.4	21	3.0	190	22.4	10.0	622.3	100	
	47 "	202	21.9	120	13.2	107	12.2	321	35.2	24.9	976.6	100	
	平均	150.0	17.9	177.5	20.8	63.8	8.9	327.3	38.7	16.3	805.6	100	

注. 収穫期間は 44 ~ 46 年は 5 月上旬 ~ 7 月下旬。47 年は 4 月下旬 ~ 7 月下旬。



第1図 年次別収量 (良果+曲果・a当り)

1) 良果及び曲果

①液肥施用区及び③元肥化成+追肥液肥施用区は、④元肥化成+追肥化成施用(標準)と同等あるいはこれを上回る収量であった。

②無堆肥液肥施用区は、2年以降の収量はかなり減収となる傾向が見られ、47年においてはこの区を中止した。

47年は別棟ハウスで実施したものであるが、①液肥施用区及び③元肥化成+追肥液肥施用区が、④元肥化成+追肥化成施用(標準)区と同等あるいは上回る傾向が見られた。

2) くず果

年次別の差は見られるが、収量の多いものほどくず果が多かった。

また、くず果の発生量は各区とも生育の後期に多く、生育の旺盛な時期はほとんど見られなかった。

4 む す び

②無堆肥液肥施用区は、2年以降の収量はかなり減収することから、有機質の必要性が判然とした。

①液肥施用区及び③元肥化成+追肥液肥施用区は、④元肥化成+追肥化成施用(標準)区と同等あるいは上回る収量であることから、液肥の施用が効果的である。

追肥は10a当り化成肥料では1回の所要時間約2時間を要するが、液肥施用の場合は、かん水と同時に行い約20分間で施用できる。したがって液肥利用により施肥作業の省力化が期待できる。

また、生育状況による施肥量の調節、土壌の悪化防止の面からも有利性がある。

エスレル散布によるハウス抑制トマトの着色促進試験

佐藤三郎・逸見俊五・小川 光
(福島県園芸試験場いわき支場)

1 ま え が き

ハウス抑制栽培では収穫期の後半が低温になり、暖房機を用いて加温する場合も経済性を考慮してやや低目に温度調整するのが普通であり、トマトでは着色がなかなか進まないのが実際の状態である。本試験はエスレルの散布によって抑制トマトの着色促進の可否を2年間にわたって検討し若干の結果を得たのでここに報告する。なお本試験を行うにあたり日本植物調節剤研究会及び2.4-D協議会に感謝する。

2 試 験 方 法

1 供試品種 豊禄

2 処理方法

(1) 1971年は次の2処理を行った。

ア 果実の肥大が終わった時に花房ごとに所定濃度(200, 300 ppm)の水溶液を散布した。

イ 収穫打ち切り2週間前に株全体に収定濃度(500 ppm)の水溶液を散布した。

処理月日はアの場合第1花房は9月13日、第2花